沙羅の樹文庫だより

NO. 204（23 年 11 月号）

見晴らし公園（函館）

《おちばのてがみ》

おちばせいいち

はる…なつ…あき　の　おもいでが
おちばになって
きれいなてがみのように
いちまい　ひらり
もういちまい　ひらり
（そだててくれてありがとう）と
だいちに　とどけられます
そして　ふゆ
ちきゅうは　かさなりあったおちばの
おもいでのつまった てがみをよみ
あたたかいセーターのように　きこんで
ふかふかと　ねむります

工藤直子詩（『のはらうたV』より）

本年も３密を避け予約制で開館です

2023 年

11 月 18 日（土）、19 日（日）
12 月 16 日（土）、17 日（日）

★**１２ 月 １７ 日午前はクリスマス会**★

来 24 年の開館日も従来通り、
第３日曜日と前日の土曜日

1 月 20 日（土）、21 日（日）
2 月 17 日（土）、18 日（日）
3 月 16 日（土）、17 日（日）
4 月 20 日（土）、21 日（日）

・・・・・・・・・

文庫・開館時間：土曜日 13：00～17:00
日曜日 10：00～15:00

子どものための読み聞かせ・おはなし会

文庫のある日曜日１０：３０～１１：００

おはなし沙羅・おはなし勉強会

文庫のある土曜日１０：３０～１２：３０

沙羅の樹文庫
〒413-0235 伊東市大室高原 7-122
☎0557-51-3737（090-6039-3782）

沙羅の樹分館ゆるかの里子ども文庫
〒413-0232　伊東市八幡野 924-1
☎0557-54-1910

開室日：水曜日 13:00～15:00
：日曜日 10:00～15:00

鳥屋野潟（新潟市）

文庫あれこれ◆真夏日あったり、急に秋を通過して真冬並みの寒さが訪れたり・・・。お空の神さまったら・・・。明日から伊豆です。大室は、床暖も空調暖房も必要のようですね。◆別紙に書きましたが、今月の私は、数ヶ月ぶりに、さまざまな会に参加しました。やはり外に出ると心地よい刺激を受けますね。◆その中で、哀しいお別れもありました。人はいつかは死なねばならないのだから、仕方のないことですが、この歳になると、死が身近に感じられます。（先月は強がっていたのですが）◆嬉しいニュースは、お伝えした発達障害の放課後スペースの子ども達に会いに行き、おはなしや絵本を読んできたこと。インフルエンザが流行っているとかで、参加者は小１から中３まで８人でしたが、みんな乗り出して絵本を楽しんでくれました❤️　おはなし・沙羅の面々も嬉しくなって次へのプログラムを考え始めました。◆皆さん、お風邪など召しませんように❗新刊もありますよ。　（西村）

ヒヨドリ上戸の実

これ、子どもの本？　大人の本？

篠崎ミツ子

『あらわれしもの』

（最上一平著　ささめやゆき絵
新日本出版社 2022）

～おじいさん・おばあさんに出会えた喜び～

「山里の握（にぎり）集落にも春が来た。・・・老人ばかりの過疎の集落で、子どもが一人もいない。子どもどころか、二十数軒の住人の中で、一番若いのが五十代だった。・・」で、『あらわれしもの』は始まる。

この本は、７つの独立した短編からなっている。そのうちの第１章・第２章、そして第６章と第７章のあらすじはこうである。

第１章。長年連れ添ったトミを１年前に亡くし、ひとりぼっちになった長次郎の話。長次郎は無口で、トミはよくしゃべった。長次郎に一番こたえたのは、トミの声がないことだった。そんな長次郎の木彫りにトミが現れてきた。そして、夜中にトミがすぐそこに立っていた！？「あらわれしもの」はトミのこと？

第２章は、この山里にやってきた２１歳の青年・龍之介。この龍之介をめぐって、茂子とふきが今まで以上に激しい舌戦を繰り広げる話。

第６章の「四人姉妹」。故郷に住む三姉妹が末の妹の病気(ALS)見舞いに行く話である。知人にこの病気になった人がいたので、この病気が難病だと言うことは知っている。重い話になると予測をしていた。が、この話で私は一番笑った。新幹線内の様子や方言（よくわからないところあり）での会話がほとんどなのだ。首から上と、左手が少し動く末の妹に今朝からのことを姉たちはおもしろおかしく語るのだ。妹に話すために道中を楽しんでいたのだ。

第７章。「明日の二人」は同じ日に生まれた茂さんとアサさん夫婦の話。二人はあと四日で95歳になる。アサさんは数カ月前から寝ていることが多くなった。三度のご飯も洗濯も掃除も何から何まで茂さんが受け持つ。アサさんは茂さんの料理したものを「なしたらこんなにまずくなるか」と言う。

その茂さんが、アサさんの好物のぼたもちを作る。アサさんの笑う顔を見たいがために。

彼らたちの昔のことが語られていることはほんの少し。今の彼らたちは頑固な人は頑固なままに、寂しい人は寂しいままに、書かれている。おじいさんもおばあさんも、どこにでもいるおじいさんやおばあさんなのだ。しかし、私は彼らひとりひとりを愛（いと）おしいと思った。

この本は高学年向けとあった。絵本だから児童文学だから、子どもが読む本と決めてしまっている自分がいる。

しかし、この本を読み終えたとき、私はこの本の人々に出会えてよかったと思った。この本は、この秋古希を迎えた私の門出の本となった。

最近好きな色の
ジュリア・チャイルド

花びらが 80 枚ある
ソンブレイユ

いつもバラの写真を送ってくれる篠崎さんです

23.11 月に入る子どもの本

絵　本

『まどからおくりもの(ビッグブック)』(五味太郎作・絵 偕成社 2003)　ID13986
『おばけのバーバパパ』(アネット・チゾンとタラス・テイラーさく　やましたはるおやく偕成社 1972)　ID13987
『あくたれラルフ　よいこになる』(ジャック・ガントス作　ニコール・ルーベル絵　こみやゆう訳 出版ワークス 2023) ID13988
『まよなかの魔女たち』(エイドリアン・アダムス作　野口絵美訳　徳間書店 2022)　ID13989
『あずきがゆばあさんとトラ』(パク・ユンギ文　ペク・ヒナ絵　かみやにじ訳　偕成社 2022)　ID13990
『ティーカップ』(レベッカ・ヤング文　マット・オットリー絵　さくまゆみこ訳　化学同人 2023)　ID13982

読みもの

『鳥』(小手鞠るい作　小学館 2023)　ID13983
『パンとバラ―ローザとジェイクの物語』(キャサリン・パターソン作　岡本浜江訳　偕成社 2012)．　ID13984
『そして、あの日―エンリコのスケッチブック』(リンデルト・クロムハルト作　野坂悦子訳　岩崎書店)　ID13991
『ベアトリスの予言―』(ケイト・ディカミロ作　宮下嶺夫訳　評論社 2023) ID13992

参考図書

『読書バリアフリー―見つけよう! 自分にあった読書のカタチ』(読書工房編著　国土社 2023)　ID13985

23.11 月に入る大人の本

フィクション

『青春をクビになって』(額賀澪著　文藝春秋 2023)　ID19123
『リラの花咲くけものみち』(藤岡陽子著　光文社 2023)　ID19124
『腹を空かせた勇者ども』(金原ひとみ著　河出書房新社 2023)　ID19125
『ラウリ・クースクを探して』(宮内悠介著　朝日新聞出版 2023)　ID19126
『レーエンデ国物語 2 月と太陽』(多崎礼著　講談社 2023)　ID19127
『新古事記』(村田喜代子著　講談社 2023)　ID19129
『恋ははかない、あるいは、プールの底のステーキ』(川上弘美著　講談社 2023)　ID19136
『幸福人フー』(坂口恭平著　祥伝社 2023)　ID19137
『東家の四兄弟』(瀧羽麻子著　祥伝社 2023)　ID19138_
『歌われなかった海賊へ』(逢坂冬馬著　早川書房 2023)　ID19139
『藍色の時刻の君たちは』(前川ほまれ著　東京創元社 2023)　ID19149
『ようこそ、ヒュナム洞書店へ』(ファン・ボルム著　牧野美加訳　集英社 2023)　ID19128

エッセイほか

『さみしい夜にはペンを持て』(古賀史健著　ポプラ社 2023)　ID19130
『歌わないキビタキ―山庭の自然誌』(梨木香歩著　毎日新聞出版 2023)　ID19131
『続窓ぎわのトットちゃん』(黒柳徹子著　講談社 2023)　ID19150
『たった独りのための小説教室』(花村萬月著　ポプラ社 2023)　ID19132
『鉄道と愛国―中国・アジア３万キロを列車で旅して考えた』(吉岡桂子著　岩波書店 2023)　ID19133
『硫黄島上陸―友軍ハ地下ニ在リ』(酒井聡平著　講談社 2028)　ID19134
『文学キョーダイ』(奈倉有里✖逢坂冬馬著　文藝春秋 2023)　ID19140
『エクス・リブリス』(ミチコ・カクタニ著　橋明美訳　集英社 2023)　ID19141
『枡野浩一全短歌集―毎日のように手紙は来るけれどあなた以外の人からである』(枡野浩一著　左右社 2023) ID19142
『義太夫を聴こう』(橋本治著　河出書房新社 2015)　ID19143
『浄瑠璃を読もう』(橋本治著　新潮社 2012)　ID19144

文　庫

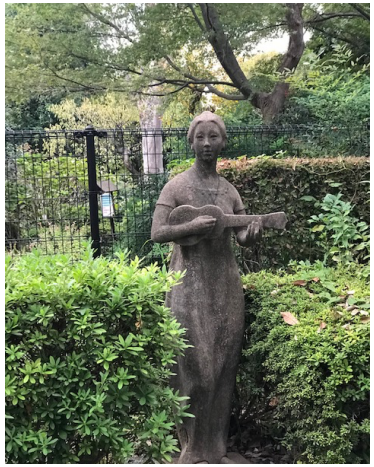
『贅沢貧乏』(森茉莉著　講談社文芸文庫 1992)　ID19146
『アンネ・フランクの記憶』(小川洋子著　角川文庫 2005)　★リクエスト　ID19145
『祭りの場・ギヤマンビードロ』(林京子著　講談社文芸文庫 1988)　★寄贈　ID19151

新　書

『隋―「流星王朝」の光芒』(平田陽一郎著　中公新書 2023)．　ID19135
『親密な手紙』(大江健三郎著　岩波新書 2023)　ID19147
『トランスジェンダー入門』(周司あきら、高井ゆと里著　集英社新書 2023)．★リクエスト　ID19148

徒然なるままに（拡大編）・・・　さ・ら

★だいぶ前から、背は丸くなり、歩くのに、足がふらつき状態だったのですが、それを良いことに、今夏は夜の散歩も怠った末、更に足腰が弱くなりました。



最寄りの駅まで15分、3回は、途中で立ち止まり、休み、背を伸ばして、20 分かけて歩く始末。これではと、今週から早朝に、近所を歩き回ることにしました。上の写真は、用賀の駅から世田谷文学館への道＜用賀いらか道＞にひっそりと立っていた‹ウクレレ?を弾く娘›です。この道を抜けると、環八で、左は東名の入口。真ん前は砧公園。

★『まいまいつぶろ』（村木嵐著　幻冬舎 2023）９代将軍家重と小姓・兵庫の間柄を描いて秀逸。文庫には７月入庫。数日前新聞の広告に。感じ入った話でした。お薦め。

←

★小学館児童文学出版賞の授章式に参加しました。友人を通じてお知り合いになった遠藤みえ子さんのご著作が受賞されてお祝いに❤️

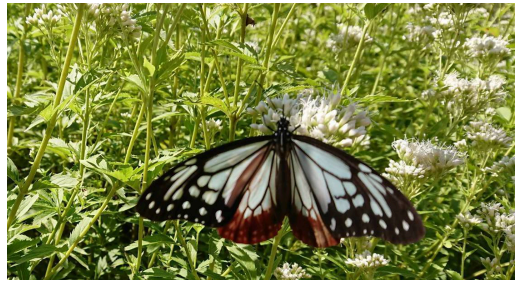
孫が文庫だよりに感想文を書かせていただいたので、読まれた方もおいでかと思いますが、終戦後、お母さんが一人で５人の子どもを連れて朝鮮から引き上げてきた体験。急に加害国の人間になった現地での暮らしが、飾ることなく子どもの目からごく自然に描かれています。大人の方もお読みください。授賞式には、審査員の富安陽子、森絵都、鈴木のりたけ、荒井良二さんが見えていました。私は、偕成社の今村社長に、冨安さんの『博物館の少女』の３巻以降続刊をお願いしちゃいました。

★今月は町田語り手の会が、生涯学習センター市民提案型講座‹語り伝えられてきた昔話の世界―昔話の採訪者と伝承の語り手を迎えて›と共催しました。市内在住、勤務、通学の人優先で 40 人ほどの４回講座。潜り込ませてもらいました。語り手として、一般の人より昔話を聴いてきたつもりでしたが、一般の人々に向けたこの講座は、生活の中で昔話をきいて育った人からの昔話、ひたすら歩き、求めた昔話を聴いて、私たちに文字に表して聞かせてくれる人々の採訪という立場から、非常にくっきりと理解できるものでした。人々のギリギリの現実から昔話は生まれ育まれてきたと。

★日本読書センターの秋の集いでは、日頃遠い中近東の本、絵本や文化について、日本とトルコ、イランなどを行き来し、文化を伝え合っているペルシャ語、アラビア語の翻訳家さん３人から、現地の昔話、生活を聞かせてもらいました。たくさんの現地の絵本や、お人形に触れながら。これも希望通りの企画でした。

★旅する蝶・アサギマダラの記事が新聞に。そしたら友人が富士山麓で撮った写真を送ってくれました。庭に藤袴を植えると来てくれるかも❗

アサギマダラ（フジバカマに誘われ）



★これまた別の友人から。

神の手・沖縄の空に何年かに１度現れる雲）

★イスラエルやパレスチナの神さまは、人を殺めることをおすすめになるのでしょうか。国境なき医師団の白根さんたちが無事でよかったです。国が大きくなって複雑になると問題も多く大きく複雑になるのはわかります。だからこそこの小さな、単一?民族で成る日本ができることがあるのでは、と。周りの顔色ばかりを伺わず、何とか・・・。もっとも自国の民（沖縄ほか）を守れない政府では望めないか。

（今月は、さ・らの埋め草で失礼しました。）